



植田重一郎さん

(滋賀県立近江学園 園長)

滋賀県生まれ。滋賀県庁行政職採用として、生活保護のケースワーカー、県税、市町村合併担当などを経て、児童相談所で児童福祉司として五年、管理職一年。この頃が、福祉との一番濃い関わりであったとご自身で述べられています。長浜高校に高等養護学校を併設するノーマライゼーション・スクールの取り組みに尽力された経験も。もともと、内向的な性格と自身で評価されていましたが、地域活動やボランティア活動等での経験が、自身を変える転機となつたと振り返っておられます。淡海学園（①）の園長を務めた後、二〇一三年から近江学園（②）の園長。

自身の歩みと福祉との関わり

齋藤 ご自身のこれまでの取り組みについて、お聞かせ下さい。

植田 僕ね、正直、糸賀一雄さんつてあんまり知らなかつたんです。四〇歳ぐらいの時に、社会福祉士を受験して、その時に勉強したのが、糸賀一雄さんを知ったきっかけですわ。この子らを世の光についていう言葉知ってるやろ？それが僕らにはしつくりくるねんけどな。子どもを権利の主体と明確にしたような言葉であるんやけども、それがいつの間にか、僕らがそれを伝えていく中で、この子らを世の光にしてやろうという上から目線になつてるんちゃうかなと、その勉強してる時にレポートで書いたんです。それが一番点数が良くて、大学の先生にもお褒めの言葉をいただいたこともあります。

といけないと今思つてるんです。職員は厳しい支援の現場で日々奮闘しています。でも、昔からやつてているだとか、他の人もやつているから正しいという支援は認めん、と。ちゃんと理論化して整理して、実践と合うかどうかを考えてそういう評価が行われて初めて、正しい支援やと思うんです。あと、もちろん技術や知識も大事やと思うけど、心の部分での支援力を現場で支援している人に強化してほしいし、できるようにしていきたいと常々思っていますね。人が、人を支援するんで、いくら知識があつたり技術があつたりしても、最後は心だと思うんです。

僕自身ね、昭和五六六年、国際障害者年に、滋賀県で身障スポーツ大会のびわこ大会で盛り上がりがつた渦中にいさせてもらつた中で、とてもよい勉強をさせていただいたんですよ。そういう障害のある人のことを一生懸命考える地域社会があるということも、その時によくわかりました。それと、あゆみ作業所(③)設立に向けた取り組みは、僕自身の二〇代の頃の障害者福祉への関わりで、非常に勉強になりましたね。地域で生活していく人たちの営みを間近で見

①淡海学園・・・一九一〇年に大津市に開設され、六二年に現在の甲賀市に移転。
全寮制の児童自立支援施設。

②近江学園・・・昭和二一年、糸賀一雄氏らによって創設。昭和二三年四月の児童
で設立。現在、社会福祉法人あゆみ福祉会が運営。

させていただくことができて、障害のある人と一緒にリニア

カーを引っ張つて、廃品回収して、それを売つて作業所の設立資金にする活動をやつてました。その時期に、「茗荷村見聞記」の上映運動を行なつたんです。田村先生が講演のようなこともしてくださいさつて。けつこうたくさんの人々来てもらいましたね。僕自身当時、自閉症がどのようなものであるかも知らなかつたんですよ。

齋藤 そうですね。まだ、その時代は、物静かな子ぐらいいなイメージですよね。

植田 そうそう。自閉症と思われる子を持つた親御さんの訴えを聞くと、切々と語つてくださるんです。その話を聞くのが、僕自身のとても良い勉強になつたんです。それで、何か熱に浮かされるようにノーマライゼーションの社会を実現しようとしていたのが、原動力になつてたね。たぶん、糸賀先生達も熱があつたんやと思うけど、今つて案外クールなんですよ。あんまり熱つてないんですね、でも、その熱つて何かものを動かす時のエネルギーとして大事かなと思うんですよ。単に昔話をしても嫌がられるだけなんですね（笑）。その熱を、いかに僕らが若い人と共有していくかが大事になるんちやうかなと思うんですよ。

発達保障と支援者としての資質

植田 近江学園の取り組みでも、発達保障が言われているんやけど、実はよくわからへんねん。園長が、こんなこと言うてたら糸賀さん怒るぞっていう話なんやけど（笑）。要は、発達を保障しなければならないという義務が社会にあるわけですよ。

齋藤 保障という言葉の意味合いでですか？

植田 うん。社会が、子どもたちを発達させなければならぬ義務をもつてているということ。田中昌人先生が書かれた本の中に、発達保障の理論でたくさん難しいことが書いてあって、何度か開きかけて断念したんですね（笑）。要するに、大人とか他者への信頼感が醸成されるような生活の空間・環境を保障していくことが、発達のベースやと思うんですよ。いろんな作業療法とかやるのも、それは、発達を促進する一つの側面的な技術ではあるんやけど。でも、基礎基本は、やっぱり子どもたちが人との関係で安心できるような環境を提供していくことやと思うんです。淡海学園にいた頃も、非行・虞犯系の子どもがいましたけど、そこでもやっぱり支援の基礎基本は、安心で安全できちつとした生活をすることでした。

齋藤 ずっと発達し得る存在だと思い続けるっていうこと

が大事なんだなあと。

植田 そうそう。だから、いわゆる児童憲章の中で言われている、人として尊ばれて社会の一員として重んぜられ、よい環境で育てられるということが発達保障の基本なんやと、僕自身思うんです。職員がやっぱりポイントになります。支援者たる職員が、子どもたちのよい見本になるといふことで、糸賀先生の頃から、近江学園では職員を「先生」って言うようになつてるんやけど。自分が子どもたちに対しても、先生たる資格があるんだろうか、そのような日々の生活を送っているだろうかということを思えてるんであれば、この職名で呼ぶことに意味があるというふうに、僕自身は思っています。今、学園でも就職したら、すぐに先生と呼ばれるやん、そんなんはほんまの先生やないねん。田村先生に聞いた話やけど、例えば、学校でやんちゃ坊主がおると、どうしようかと思い悩んでるけども、家帰つてふつと思つた時に、私はこの子にひょつとして教えてもらつてるんちやうやろか、育ててもろてるんちやうやろか、あたりがたいことやなと思えるぐらいになつたら、それは本当の先生やと思うねん。けつこう自らに厳しい姿勢やけど、それを職員さんには持つてほしい。実際に支援に入つてない僕が、こんなええ格好というか、現場の苦労も知らんとつて思つてはるやろうけど、職員さんたちがその大変な仕事を

を乗り越えたら、とても素晴らしい人になるんやと、僕は思うんです。

地域との連携の重要性

齋藤 地域との取り組みとしては、どのようなことに取り組んでおられるんでしようか？

植田 糸賀先生達が近江学園を滋賀県で作られたことによつて、地域との連携の土壤ができるてているんやと思う。知らず知らず、県民の中に近江学園を起点として障害福祉の考え方、思想みたいなところが広がつていったんかなと。地域との連携も、糸賀さんも言うてはるんやけど、南郷の近江学園の時に早くに有名になり過ぎたんやと。その時に、地元の南郷の人が、近江学園の職員は道で出おうても頭も下げへんと。鼻がたこなり過ぎてるんちやうかと。それが糸賀さんの耳に入つて、天下の近江学園であるばかりでなく、地元から愛され親しまれる学園にならなくてはならないと常に言うてはつた。今でも、知らん人に出おうてもしつかりあいさつをするようにと職員には言つてるんやけどね。そういう心掛けが地域との関係を保つために大事かなあと。

あとね、やっぱり施設の内の支援をするだけではいけない

いと思うんですよね。なので、今年から、地域の町づくり協議会に加入していて、うちのスタッフを送っているんです。地域との繋がりは大事にしないといけないし、施設は、何かとボランティアや奉仕作業で来てもらうことが多いやん。それってどうなのかなと思うんですよ。障害者福祉分野の社会資源としての側面も持つてることが多いやん。そしての側面も持つてることが多いやん。そこで、その施設長さんは、「お宅の子、なんでお風呂の蓋を閉めはらないのですか?」って言われはつてんて。それで、その施設長さんは、はつと気付かはつた。施設のお風呂は、大浴場で子どもを次々にお風呂に入れてたから、風呂を出たら浴槽の蓋を閉めるという習慣がないですやんか。やっぱり、実際の生活に近い形で子どもたちの支援をすること、そして家庭的な心のつながりを築くことが、社会的養護の中でも一番大事な部分かなというふうに思うんです。そやから、二〇一三年に小規模グループケア棟「ひまわり」というのを作つたんです。

社会的養護の変遷と支援における落とし穴

植田 子どもたちの中には、社会が育ててあげていかなければならぬ子どもたちがたくさんいます。いわゆる被虐待の子どもたちですね。戦後、糸賀先生達が近江学園をつくらはつた一つの動機でもあつたように。いわゆる生活困難児、戦災孤児たちを社会が育てるべしというふうに設立趣意書にもあります。今は社会が子どもたちを育てざるを得ない時代になつてきて、それは、近江学園の使命・役割なのかなというふうにも、私自身思つています。

作品を作るということ

植田 糸賀先生も、特異才能を商業ベース化することの危険性を指摘してゐるんやけどね。八幡学園(④)の山下清さんが脚光を浴びた当時、山下さんみたいにうちの子もしてくれとか、なんでうちの子は山下清みたいに教えてくれへんねんとか、施設に言いはる保護者の方もいたそうですね。

でも、施設つて限界があつて、今一棟あたり一九人の子どもたちが生活しているんですけど、そんな家、普通ないですやん。でね、ある養護施設の施設長さんが言つてはつたんやけど、その施設の子が時々お世話になつていた里親さんから「お宅の子、なんでお風呂の蓋を閉めはらないのですか?」って言われはつてんて。それで、その施設長さんは、はつと気付かはつた。施設のお風呂は、大浴場で子どもを次々にお風呂に入れてたから、風呂を出たら浴槽の蓋を閉めるという習慣がないですやんか。やっぱり、実際の生活に近い形で子どもたちの支援をすること、そして家庭的な心のつながりを築くことが、社会的養護の中でも一番大事な部分かなというふうに思うんです。そやから、二〇一三年に小規模グループケア棟「ひまわり」というのを作つたんです。

でも、そういう話になつては、子どもたちの本当の教育ということじゃないだろうと僕も思います。近江学園のギャラリーつてもう見てくればつた？

齊藤 ギャラリーですか。旧体育館のところのですよね。

植田 そうそう。本人の中に、作りたい作りたいというエネルギーが溜まつて、外に出て作品になつていいと思うん。そういう繰り返しにならないとあかんのかなと。あと、この間、京都新聞の記者の人にはめられた子が俄然張り切つて、ほめられた作品と同じようなものを作つて、それを見てほめられるとなると思つた横の子も同じようなものを作りかけて。なかなかおもしろいんですよ。やつぱりほめられたいと思いが、かわいらしいなつて思うんです。

社会で自立するために

近江学園の課題への取り組み

してやつてるんやけど、木工なんか危ないしね、ずっと見てんならんさかいにけつこう手厚い支援をしてるんです。そこは、近江学園の特徴やというふうに、最近思つています。子どもたちに、働くということを学んでほしいねん。昭和初期から戦後の労作教育の取り組みというのは、まさに近江学園の作業教育につながつてているのかなと。障害のある子やさかいに保護するというよりは、その子たちが持てる能力は、やつぱり花咲かせなければならぬということだと思います。

植田 今の中では、重度の子たちは、年金とかが受けられるから一定の生活は可能なんやけど、年金がもらえないかもしれないボーダーラインぐらいの障害のある子ども達に対しては、就労に向けて作業教育をしてましてね。芸術的な作業じやなくて、生産的な作業トレーニングを優先

④八幡学園・・・一九二八年に創設。千葉県にある社会福祉法人春濱会が運営している知的障害児施設。

する方は、「あの近江学園がなんや」ということになる。でも、現実はさつき言つたことから、やっぱりそこのギャップが大きいというのは、今回改めて知らされたところなんですけどね。あのような残念な事件が起こった今の近江学園には、児童虐待防止にずっと取り組んでいるということが必要となるんですよ。そして、その姿勢を発信していかなければならなくて、どれだけいい取り組みをしていても、発信して伝えなければならないと思うんです。

齋藤 今は、例えばどんな取り組みをされているんでしょ
うか？

植田 近江学園だけでなく他の施設でも、支援でそれぞれの悩みを持つていてね。糸賀先生の生誕一〇〇年が縁で鳥取の皆成学園（⑤）と今年から交流会をすることになったんです。例年、近江学園内で支援の研究の成果を報告する実践報告会いうのをやつていてね。今年は、皆成学園の人もゲストで呼んで一緒にやろうと思うんです。発表するだけよくできましたねっていう発表ではいけない。内容を共有するだけやなくて、ディスカッションできる発表会にしなあかんと言っています。とりあえず、質問せいと言つたんやけど、いつも私ばっかりが質問してる（笑）。ほんで、その質疑応答した内容も記録する。やつたらやりつ放し、発表したらしつ放し、それではダメやと。今年もちやんと

デイスカッショーンして、さらに、県内の他施設の方にも来てもらつて、深めていこうと思っています。

仕事観とボランティアの意義

齋藤 あゆみ作業所の設立に向けた取り組みに携わつておられた頃の話を、もう少し詳しくお聞きしたいのですが。

植田 僕は、周りの人の情熱とかに感染しやすいタイプやと思ってるんです。発熱源は、職場の同僚であつたり、先輩であつたりするんですけどね。基本的に調子乗りなんです。同調しやすいし、共鳴しやすいタイプなんかなど。もともとは、人前で話す時は先に涙が出るほど内向的やつてんけどね。

齋藤 そうなんですか。でも、前例をよしとせず、変えていこうという価値観もお持ち合わせですよね？

植田 前と同じことをやつても目立たないでしょ？おもしろいことが、好きなんです。目立ちたがり、ということはないんやけど。昔から、写真写るのも一番端っこやつたし。山本 その内向的な性格と、今されているお仕事との繋がりつて、どう繫がつてているのか気になつたのですが、そのあたりつて・・・。

植田 今の仕事は、公務員人生の途中にあつた仕事だと思うんですよ。たまたま、県の職員という組織に入れてもらつて、たぶん流れついてこの場にいると思つてるんやけどね。ただ、流れついたそれのところでそれなりの仕事をしたいとう思いがあるから、評価していただいたところもあるやろし、全然あかんやんかというところもきつとあるんだと思うんだけど。僕の性格は、公務員というところにつながっていたんだと思う。

四四、五歳までは、できんことは最初からできんと。できうなことでも、「できるかなあ」と言しながら、ちょっともつたいつけれどくと。そんな感じで仕事してたんやけど、ある時に、頼まれたら、「はい」としか言わんとこうつてなつてん。娘ができた平成九年ぐらいかな。それは、自分の人生の中でちょっとプラスの転換やと思うねん。その時に生まれ変わったように思つてるんです。ほんで、はいはい、言うて受けてたらどんどん、地域の役員とか、PTAの役員とかそういう役が増えてんけどな（笑）。実際やつてみると、地域のいろんな自営業者とかいろんな方と一緒に仕事をするのが、けつこうおもしろくて、その時に、公務員で得られなかつたすごくポジティブな取り組みを経験させてもらつたんです。地域

の人と一緒に取り組んでいくつて、地域の人が喜んでくれるんですよ。たまたま、県の職員という組織に入れてもらつて、たぶん流れついてこの場にいると思つてるんやけどね。ただ、流れついたそれのところでそれなりの仕事をしたいとう思いがあるから、評価していただいたところもあるやろし、全然あかんやんかというところもきつとあるんだと思うんだと思う。

もう一つは、仕事は給料もらってやつてているから、いくら立派な仕事をしても、そのことに対する対価をもらつてているんだから、何もほめられるようなことやないと。でも、給料をもらわずにやつてている仕事は、どんな小さな仕事でも、とても素晴らしいことやと思う。それで、そういうお金をもらわずにやる活動が、自分自身の人格を高めていくんだよつていう話は、若い人達にはしています。知らない人と関わる場をどんどん持っていくということは、人間性を高めたり、広めたりできると、私は経験から思つてゐるけどね。

これからのお福扯について

齊藤 では、最後にこれからのお福扯はどうあるべきか、お聞かせいただけたらと思います。

植田 悲しい涙とか苦しい涙を流す人が、一人でもなくななるという方向性が福祉だと思います。例えば、社会福祉法人は、公益事業せなかんつていうこととかが、今言わ

⑤皆成学園・・・鳥取県にある児童発達支援事業を行なう入所施設。

れてると思うんやけど、でも、社会福祉事業自体が公益事業なんちやうかと。現状は、公益事業と営利事業とが社会福祉法人に内包されてきていて。福祉というのは基本的に公益事業であると思うんやけどね。そういう中で福祉のことを考えることであれば、自分の子ども達に悲しい、苦しい思いをさせたくないという親の思いが、願いがあるならば、世の中の子ども達みんなにそういう思いをさせたくないというのが福祉を考える基本なのかなと思います。

齋藤 今日は、多くの貴重なお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。